

『法然上人に於ける一念多念の問題』 の一考察

「多念相続の必要なる理由」

寺 田 昌 業

法然上人は、小消息に

行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし。
一念尚ほ生る。況んや多念をや。

と述べているように、一念でも往生は出来ると説いて、人には念仏の相続を勧め、自からも日に五・六万遍を唱えている。それでは一念でも往生出来るのに、なぜ多念相続しなければならないのか、その理由はどこにあるのか。

選択集第 八章に

具此三心必得生也。若少一心即不得生。

と述べているように、必ず三心を具足しなければ往生は出来ない。一つでも欠ければ往生は出来ないと云つてゐる。無量寿経卷上に説かれる

設我得仏十方衆生。至心信樂欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。

という阿彌陀仏の第十八願によつて往生の業が決定するといふのである。即ち、至心信樂欲生我國の、至心は至誠心にあたり、信樂は深心であり、欲生我國は回向発願心にあたるのであり、三心の事である。乃至十念とは、上画一形下至十声一声を意味し、上は一生涯つくすことである。即ち念仏相続であり、多念を意味し、至心信樂欲生我國は安心、乃至十念は起行である。といふことは吾等衆生は至心信樂欲生我國の三心を具足し、乃至十念の起行を修して、若不生者の本誓に応えなければならぬのである。このように安心と起行とは車の両輪のように相扶けてゆかねばならない。従つてたとい一念でも三心具足すれば往生出来るのであるが、実際には一念で三心具足することは困難である。というよりも出来ないものである。そこで多念相続が勧められるのであつて、法然上人の念仏義が「行門為本」といわれているように、念仏相続することによつて、自ら三心が具足されるので

ある。即ち、法然上人行狀絵図卷二十一に

ただ彼仏今現在世成也。当知本誓重願不虛衆生称念必得往生。の釈を信じて、ふかく本願をたのみて、一向に名号を唱べし。名号を唱れば、三心をのづから具足する也。

と述べているように、三心を具足すれば、必ず往生出来る。しかしその三心は、称名念仏を本願生因の行である。と信じて、それを唱えていけば、自然と三心は具足されるのである。称名念仏は、選択本願の正定業であるから、浄土の行人は、この念仏に就いて得生の信を立てることが根本要件でなければならぬ。随つてこの就行立信の趣旨が、実行の上に現われて称名の相続となり、信は行を引き、行は信を強めて、自然に三心具足し、往生の業事が成就するのである。

このように三心具足の念仏でさえあれば、十声でも一声でも決定して往生は出来るけれども、法然上人は恒修相続すべきだと勧められているのである。そしてこの恒修相続を以て、法然は善導の説によつて本願の念仏の本

則とするところであると解いているのである。即ち選択集第三章にも、法然上人は「善導の乃至十念」の句の乃至の事を「云乃至者従多向少之言也。」といつて、一向に乃至を従多向少の義に解いている。「多とは上画一形なり。少とは下至十声一声なり」と釈しているが、これによると乃至十念とは、少なくとも十声一声は唱え、上は発心已后平生の一生涯を意味している。彌陀の慈愛は臨終の一念までも救いたまう大悲なれば、況んや平生の多念のものは尙さら救われるべきである。一念でも十念でも往生出来ると信じて、退転なく、命の終るまで勇猛精進せよといつてゐる。

又四修の法を設けて無間長時の二修の方規を立てたこともわすれてはならない。即ち「行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし」と法然上人が云つてゐるのも、又法然上人が善導の説を守つて、「専ら称名一行を修し、一期不退に相続すべきである」と教えている中で、「一行を専修する」というのは、四修の中の無余修であり、「相続不斷」というのは無間修であり、「一

期不退」というのは長時修である。このように一期不退の所持を勧めたのも、多念相続せよといっているのである。

又選択集第三章に

念仏易修。諸行難行。(中略)正由称名易故相続即生
(中略)念仏易故通於一切。

とあるように、念仏は易行である。易行であるから相続が出来る。又易いが故にだれにでも出来るのである。愚鈍下智、罪人であつても、どのような所でも、必ず往生出来ると信じて名号を唱え、懈怠なく精進すれば、だれでも恒沙無上の功德を成就することが出来る。

又醍醐本法然上人伝記に、

歡喜踊躍の心、すなわち発りたらば、三心具足せるし
るしと知るべきなり。歡喜とは往生決定と思う故に喜
ぶ心なり。

といい、又十二問答に

こゝろざしだにもふかければ、自然に相続はせらるる
なり。

と述べている如く、一念でも往生出来るといふ決定心があれば歡喜の心となり、三心は具足され、多念相続せなければおれなくなるのである。即ちよろこびの念仏となるのである。往生浄土用心に、

一念十念にても生まれ候ほどの念仏とおもひ候うれし
きに、百万遍の功德をかさぬるにて候なり。

と述べられている如く、法然上人が多念相続を勧められ
る趣意を知ることが出来るのである。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。